

関東大震災から百年が経ちます。災害は忘れた頃にやってくる、という箴言は発災直後に火災の記録を残すべく奔走した寺田寅彦の有名な言葉です。わたしたちは、その「忘れた頃」の時代を生きています。首都直下地震や南海トラフ地震、さらには富士山の噴火など、いつ起きてもおかしくない時代を生きていることを肝に銘じておく必要があります。

東日本大震災では2万人近くの方が亡くなりました。一旦大災害が起きれば、多くの人命が失われ多数の被災者が出ることはわかっています。いろいろな試算がありますが、首都直下地震では10万人、南海トラフでは30万人の方が亡くなれると言われていています。東日本大震災の実に5倍から15倍の方が亡くなるのです。また、中越地震や能登半島沖地震でも分かる通り、災害が起きればその地域が長期に渡り孤立してしまうことも想定できます。私たちは四季に恵まれた豊かな国土に暮らしていますが、同時に世界でも有数の災害多発国に暮らしていることを思い出しておくことも必要です。

いたずらに不安を煽るつもりはありません。「心の備え」が必要だということを言いたいのです。「心の備え」があれば、何かあった時に最善の対応ができるからです。東日本大震災の復興に参画した経験から得た教訓は、ともかく命が助かること、命が助かりさえすれば後はなんとかなる、ということです。そして、小学校の避難事例でも明らかになった通り、「心の備え」があれば助かる確率が格段に高くなるということです。「防災」に取り組むことは、その「心の備え」を養うことに他なりません。そして強調しておきたいのは、いざ事が起きたときは、皆で協力して助け合う「心の備え」をしておくことです。

平安時代の末期、「方丈記」を書いた鴨長明の時代は、短い期間に、火災、水害、地震、大風、などに次々と見舞われ、当時の京都は壊滅状態になったそうです。

しかし、その一方で、「新古今和歌集」が編まれるなど、この国の文化的成熟が最高度に達した時期だと言う人もいます。災害を文化にする、これがこの国の強さであり生き方でもあると見ることもできます。

また、我が国の各地にある「祭り」も、実は裏側に災害に対する備えの機能を持ち合わせていることも思い出しておく必要があるでしょう。多くの場合、「祭り」を作り上げるのは地元の消防団の人たちです。彼らは常に災害に備えている人たちで、いざとなれば最前線で活躍する人たちでもあります。つまり、「防災」と「文化」が一体化したのが「祭り」なのです。

災害を完全に克服することはできません。命を救うためにわれわれにできることは、「心の備え」をしておくこと、そして、災害に負けない「文化」を育てておくことです。美術大学なりの豊かで楽しく創造的な「防災」のあり方があるはずで、それが生み出せれば、それは全国に発信できる価値のあるものではないかと思っています。

みなさんのご理解とご協力をお願いいたします。